

日本人類学会進化人類学分科会

ニュースレター

2019/01



目次

次回シンポジウム

- 第 42 回シンポジウム「初期人類の睡眠を考える：森林とサバンナの昼と夜」 2

平成 30 年度開催シンポジウム記録

- 第 41 回シンポジウム「原経済の行為論-大型類人猿とヒトにおけるモノの授受をめぐって」 3

保坂 和彦（鎌倉女子大学児童学部児童学科）

- 「チンパンジーの肉分配再考-ダイアッドを超えた対面的相互作用の場としての肉食クラスター」 4

黒田 末壽（滋賀県立大学名誉教授）

「食物分配が平等原則の客体化であるとはどういうことか？

- ー類人猿社会の食物分配と社会システムの関係ー」 9

鈴木 滋（龍谷大学国際学部）

- コメント「人類学の視点でサルを捉えるとはどういうことか」 12

松村 圭一郎（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

- コメント「視線のコミュニケーション：互酬性概念の再考に向けて」 15

田島 知之（京都大学大学院理学研究科）

- コメント「ヒトとサルの境界をめぐる自発的分配について」 17

表紙写真：マハレのチンパンジーのシラミ分配

マスディ（右）がシラミの溜まった下唇を突き出してシケ（左）の分配要求に応える [写真提供：保坂和彦]

次回シンポジウム

第42回シンポジウム

「初期人類の睡眠を考える：森林とサバンナの昼と夜」

日時： 2018年 10月 21日（土）14:30～17:30

場所： 三島市民文化会館・大会議室（三島市）

オーガナイザー：座馬 耕一郎（長野県看護大学）

森林からサヴァンナへ。この初期人類の生息環境の変化は、睡眠にどのような影響を及ぼしたのだろうか。乾燥地で暮らす人々や、森林やサヴァンナで暮らすチンパンジー、そして捕食者の活動に関する資料をもとに、検討したい。

講演

座馬 耕一郎（長野県看護大学）

「霊長類の睡眠の特徴と進化」

高野 智（日本モンキーセンター学術部）

「化石記録は類人猿や初期人類の睡眠行動について何を語るか」

仲澤 伸子（京都大学大学院理学研究科）

「捕食者の活動リズム」

小川 秀司（中京大学国際教養学部）

「サバンナウッドランド地帯のチンパンジーはどんな環境で眠るのか」

今村 薫（名古屋学院大学現代社会学部）

「狩猟採集民の睡眠と休息」

「原経済の行為論

ー大型類人猿と狩猟採集民における食物の授受をめぐるー」

2018 年 6 月 9 日(土) キャンパスプラザ京都 6 階 第 8 講義室 (京都市)

オーガナイザー： 竹内 潔 (総合地球環境学研究所)

保坂 和彦 (鎌倉女子大学児童学部児童学科)

「チンパンジーの肉分配再考ーダイアドを超えた対面的相互作用の場としての肉食クラスターー」

黒田 末壽 (滋賀県立大学名誉教授)

「食物分配が平等原則の客体化であるとはどういうことか？

ー類人猿社会の食物分配と社会システムの関係ー」

コメント： 松村 圭一郎 (岡山大学大学院社会文化科学研究科)

田島 知之 (京都大学大学院理学研究科)

鈴木 滋 (龍谷大学国際学部)

モノの「やりとり」は社会と自然とのインターフェースであるとともに、個人を接続する社会的営為です。これまで、この営為をめぐる哲学的な思惟が凝らされ、社会学や文化人類学ではさまざまな理論的アプローチが試みられてきました。また、経済学は、まさにヒトがモノを「やりとり」する側面を体系化した学問として成立しています。

このシンポジウムでは、大型類人猿と狩猟採集民における食物の授受についての事例の検討と討論をとおり「所有」、「互酬性」、「分配」などの諸概念を問いなおし、従来の諸分野よりも開かれた地平においてモノをやりとりする行為の根源性ー原経済行為ーを考察して、新しい研究の地平を切り拓きたいと思います。

チンパンジーの肉分配再考

—ダイアッドを超えた対面的相互作用の場としての肉食クラスター—

保坂 和彦

鎌倉女子大学児童学部児童学科

1 はじめに

チンパンジーの食物分配は、食物を与える個体の行動原理がさまざまに論じられてきた(Silk et al., 2013 ; Hosaka, 2015)。しかし、多くの議論は、分配する個体が「食物の一部を失う代わりに何を得るのか」という互惠性の問題に集中してきた。もちろん、そのような動機づけレベルの解明も必要であり、私自身、マハレ（タンザニア）のチンパンジーを対象に、 α 雄の同盟戦略の一環として肉分配を扱ってきた経緯がある（西田・保坂, 2001）。

一方、チンパンジーの食物分配を、ヒトやヒト以外の霊長類と比較する進化史的視点も重要である。とくに *Pan* 属近縁種ボノボは、肉分配は稀であるが、果実分配が比較的高頻度に観察できる。*Pan* 属 2 種の社会はさまざまな点において対照的であることが知られており、チンパンジーの肉分配はそのような違いを浮き彫りにする情報としても好都合である。しかし、黒田（1999a）が試みたように、*Pan* 属 2 種の食物分配をほぼ同じ行動と見なし、モノを介してコミュニケーションする相互作用として再評価すると、共通祖先からヒトへの進化に至る過程で制度や規範を発生させた原初的な対面的相互作用が抽出できるかもしれない。そのような視点からチンパンジーの肉分配研究の可能性を展望したい。

2 霊長類における食物の所有と分配

食物 1 個が 1 個体に独占されずに複数個体に消費されることを、食物の移動 (food transfer) と呼ぶ。これには、消費個体が満腹して捨てた食べ滓を拾う場合や、消費個体から食物を奪う場合も含まれる。食物分配 (food-sharing) には、食欲に動機づけられている個体が自らの選択として食物の一部または全部を放棄する側面があるため、上記の場合を排除した定義が必要である。本稿では、食物分配をある

食物の採食に動機づけられた個体が、所有する食物を自らの意思決定にもとづき、非攻撃的な文脈において他個体に移動する行動であると定義する。

ここで使用した所有 (possession) の概念は、Kummer がヒヒを対象におこなった一連の研究を参考にしたものである。ある個体が資源に近接し、防御の構えを示しているとき、相対する他個体は仮に優位であっても、その資源を奪うことを控える傾向が検出できる場合がある。これを所有への尊重

(respect) とみなせば、個体の行動に影響する習慣としての所有は定義できる。霊長類における所有は、個体と個体が相対している状況においてのみ維持されている状態であるため、時間・空間を超えて維持されて取引の対象ともなる所有権 (ownership) とは区別したほうがよい。

所有は、食物を保持しようとする個体とそれを尊重しようとする他個体が同時にいて成立する状態である。一方、食物分配は、他個体側の自制

(self-restraint) に支えられた行動である。この認識から出ることにより、所有者 (possessor) とたかり (scrounger) の二者間相互作用としての食物分配を記載することが可能となる。

所有者がイニシアティブをとる積極的 (active) 分配は、類人猿には見られず、新世界猿の一部に見られる。しかし、これは血縁選択によって説明可能な給餌の範疇に入る行動である（西田・保坂 2001 ; Jaeggi & van Schaik 2011）。本稿で扱いたい食物分配は、*Pan* 属において一般的な、物乞者がイニシアティブをとる消極的 (passive) 分配である。

3 二者間相互作用としての食物分配

チンパンジーの食物分配は、たとえ母子間であっても消極的分配である。母親が積極的に食物を与えることはなく、子が分配要求をすることへの反応と



a.



b.

図1. α 雄 AL (右) の持つアカコロブスの肉をねだる MA (左) のさまざまな表情・ジェスチャー。

a. 口をとがらした表情。同時に、フィンパーを発している。b. 掌を上にして右手を差し出す物乞いジェスチャー。AL は視線を逸らしている。

して食物の一部が渡る (Nishida & Turner, 1996)。チンパンジーのオトナ間食物分配は、系統発生的には母子間の食物分配に起源があると考えられるが、不連続な要素も多い。ねだる側は、覗き込み、掌を上にして片手を差し出す物乞いジェスチャー、口を尖らす表情などの表情・音声・ジェスチャーを示すが、より儀式化・誇張されたコミュニケーションとしての側面が目立つ (図1)。

Gilby (2006) は、チンパンジーの食物分配について active/passive を区別した。前者は、所有者が食物の一部を他個体に手渡したり、口移ししたりするパターンである。後者は、他個体が食物の一部を持ち去るのを所有者が黙認するパターンである。食物の移動のきっかけが他個体の分配要求もしくはその

徴候 (接近など) にある以上、いずれも消極的分配に属する。混乱を避けるため、前者を反応型分配 (reactive sharing)、後者を許容された盗み (tolerated theft: Blurton Jones, 1984) と呼ぶことにする。

発表では、二者間コミュニケーションとしての食物分配の事例として、1992 年 1 月 11 日に撮影したシラミ分配を紹介した。マハレ M 集団の 21 歳 β 雄 SU と 14 歳ワカモノ雄 MA の間で 2 セッション (計 80 分間) の毛づくろいが観察された。食物分配はすべて MA $\Rightarrow$ SU の方向であり、分配されたモノは毛づくろい収穫物であった。その実体は当時不明であったが、後年、シラミであると判明した (Zamma, 2002)。食物分配の対象が通常、1 個体で消費するには大きすぎる果実か肉であることを考慮すると異例なほど栄養価の低い食物である。SU は病気のため痩せており、前後の行動からも極度に空腹であったことが示唆された。毛づくろいは、ほぼ MA からの一方的なものであった。MA が SU に背中を向けてリーフ・グルーミング (毛づくろいして口の中に溜めたシラミを葉の上に吐き出し、観察する行為) を始めると、SU が覗き込み、葉を掴み取ったり頭を掴んで振り向かせたり高圧的な分配要求をした。MA は葉を (1) 盗られるのを黙認したり、(2) 口移しでシラミを与えたり した。SU は当初、毛づくろいを返さなかったが、開始後 40 分後、2 回目のシラミ分配の直後に相互毛づくろいの要求に応じた。さらに 3・5・6 回目のシラミ分配の直後には、SU は自発的に MA に毛づくろいを返した。結局、SU による 7 回の分配要求に対し、MA は 6 回のシラミ分配をおこなった。

下線部 (1) は許容された盗みである。優位者 SU の分配要求は高圧的なものではあったが、強奪といえるほどの攻撃的文脈には該当しない。さらに MA に一方的に毛づくろいさせていた SU が分配直後に毛づくろいを返した事実は注目に値する。この瞬間、SU にある種の寛容が生まれ、圧倒的に劣位の MA との間に束の間の対等性を示したと解釈することが可能かもしれない。

下線部 (2) は反応型分配である。ハラスメント仮説 (Wrangham, 1975 ; 西田, 1981 ; Gilby, 2006) を援

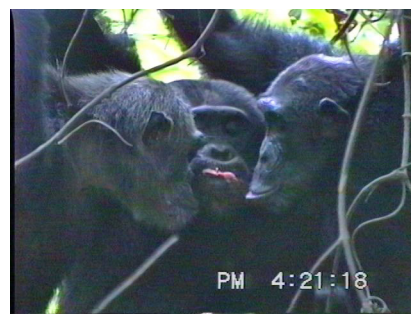
用して MA が SU の攻撃コストを回避したとする説明が最も簡便であるが、SU の異常な食欲に気づいた MA が何らかの共感に基づいて分配したという可能性も否定はできない。

ボノボの食物分配の基本をなす対面的二者間相互作用 (face-to-face dyadic interaction) の行動形態は、チンパンジーの食物分配とほぼ同じである (黒田, 1999a)。そこで、モノを介した二者間のコミュニケーションという観点において両種の食物分配を同一視すると、どのような展望が開けるであろうか。Pan 属 2 種の類人猿は、ほぼ同じ行動を少し違うパターンでおこなうことにより、好対照な社会をつくっているのかもしれない。あるいは逆に、両種の好対照な社会が、観察された食物分配のパターンに可視化されているのかもしれない。

4 社会的空間としての肉食クラスター

ダイアッドを超えた相互作用、すなわちポリアディックな相互作用 (polyadic interaction) としての食物分配は、チンパンジーでは、肉食クラスター (meat-eating cluster) という社会的な空間として実現している。たとえば、狩猟が成功した直後などに、しばしば、肉を持つ個体のもとへ、肉を食べたい個体が集まり、ねだりねだられ叫び合う大騒ぎとなることがある。そこにあるのは、単に肉を持つ者と持たざる者を放射状につなぐ二者間相互作用の集合ではない。持たざる者の間の相互作用が肉食クラスターのサイズや構成を適正なレベルに落ち着かせるであろうという意味で、ポリアディックな相互作用が生じている。実際、騒ぎが落ち着くと、比較的静かに肉を食べ続ける時間に移行する。

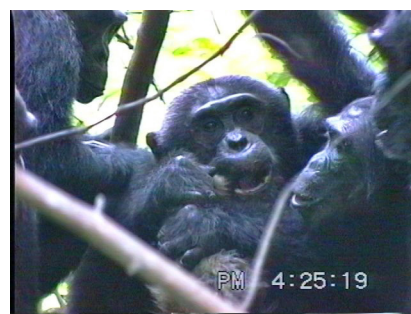
発表では、1992 年 2 月 4 日に撮影した α 雄 NT の肉分配クラスターが形成されていく約 6~8 分間の映像を紹介した (図 2)。16 時 18 分、アカコロブスの肉を抱えて 10 メートル高の樹上に座っている NT の正面からオトナ雌 DA が覗き込み、物乞いジェスチャーをする。別のオトナ雌 WL が脇から覗き込む。1.5~2 メートル下方には、若いオトナ雌 2 頭 (PI, XT) が陣取り、様子を伺う。4~7 メートル下方にいるオトナ雄 2 頭 (BA, AJ) が NT たちを見上げている。真



a.



b.



c.



d.

図 2. α 雄 NT を多数の物乞者が囲むかたちの肉分配クラスター。a. 肉を咀嚼する NT をオトナ雌 2 頭 (左: WL、右: DA) が覗き込む。b. NT は視線を上逸らす。c. 肉をかじる NT。d. DA が肉をかじり出す。後方には AA が現れ、いきなり肉を握る。

下の地上には、肉片が落ちるのを待つ年寄り雌 HA とワカモノ雄 DG がいる。3 分後、肉を咀嚼している NT は WL と DA に両側から覗き込まれ、視線を上逸らす。さらに、今現れたオトナ雌 CA が逆さ吊りで枝にぶら下がり正面から NT にパントグラントする。さらに 3 分後、ワカモノ雌 AA が合流し NT に近づきパントグラントすると、脇に陣取る DA、WL、CA が AA に吠えたてる。AA はかまわず肉にかぶりつく。さらにオトナ雌 ZP が AA の脇から顔を出して参加する。AA は大きめの肉片をちぎり取るのに成功すると、肉食クラスターを急いで離れる。残った雌 4 頭は激しく AA に吠えたてる。

注目したいのは、この事例において肉食クラスターの構成やサイズを決めているのは、専ら肉をねだる側の個体であるということである。遅れて加わってきた若い雌や遠慮なく肉をちぎり取っていく雌に対して、一部の雌が連合して吠えたてるなどした結果、肉食クラスターは所有者+4 頭に収まっていった。こうして落ち着いた集団はしばらく比較的静かな共食モードに入っていくことが多い。

同様のポリアディックな相互作用は、ボノボがアフリカパンノキのような巨大果実を食するときの食物分配クラスターとして実現しているようだ(黒田 1999b)。またルイコターレ(DR コンゴ)のボノボを調査した Fruth & Hohmann (2018) は、「ダイカー狩猟に成功した α 雄が単位集団の枠を超えて肉分配した」という稀少事例を報告している。 α 雄と同じ集団の雌に加え、偶然遭遇していた別集団の雌までも肉をねだりに来て、分配されている。チンパンジーと異なりよそ者をしばしば受け入れるボノボの社会が可視化された事例といえよう。また、面白いことに α 雄以外に現場にいた雄 7 頭は肉をねだらなかつた。雌が社会秩序の核となっているとされるボノボらしさが表れているようにも思われる。

いずれにしても、*Pan* 属の食物分配には、ポリアディックな相互作用を生じ、社交的な場として社会関係の構築・変容に影響する可能性が秘められている。それが日常的に対面している集団内での相互作用を超えて、見知らぬ集団との間で頻繁に繰り返さ

れると、どうなるのであろうか? 思考実験として興味が尽きない。

参考文献

- Blurton Jones N (1984) A selfish origin for human food sharing: Tolerated theft. *Ethology and Sociobiology* 5: 1-3.
- Fruth B, Hohmann G (2018) Food sharing across borders. *Human Nature* 29: 91-103.
- Gilby IC (2006) Meat sharing among the Gombe chimpanzees: Harassment and reciprocal exchange. *Animal Behaviour* 71, 953-963.
- Hosaka K (2015) Hunting and food sharing. In *Mahale Chimpanzees: 50 Years of Research*, Nakamura M, Hosaka K, Itoh N, Zamma K (eds.), Cambridge, UK: Cambridge University Press, pp. 274-290.
- Jaeggi AV, van Schaik CP (2011) The evolution of food sharing in primates. *Behavioral Ecology and Sociobiology* 65: 2125-2140.
- 黒田末寿(1999a)『人類進化再考—社会生成の考古学』以文社.
- 黒田末寿(1999b)『新版ピグミーチンパンジー—未知の類人猿』以文社.
- 西田利貞(1981)『野生チンパンジー観察記』中公新書.
- 西田利貞・保坂和彦(2001)「霊長類における食物分配」『ホミニゼーション』(西田利貞編) 京都大学学術出版会, pp. 255-304.
- Nishida T, Turner LA (1996) Food transfer between mother and infant chimpanzees of the Mahale Mountains National Park, Tanzania. *International Journal of Primatology* 17: 947-968.
- Silk JB, Brosnan SF, Henrich J, Lambeth SP, Schapiro SJ (2013) Chimpanzees share food for many reasons: the role of kinship, reciprocity, social bonds and harassment on food transfers. *Animal Behaviour* 85 941-947.

Wrangham RW (1975) The Behavioral Ecology of
Chimpanzees in Gombe National Park, Tanzania.
Ph.D. thesis. Cambridge University.

Zamma K (2002) Leaf-grooming by a wild
chimpanzee in Mahale. *Primates* 43: 87-90.

食物分配が平等原則の客体化であるとはどういうことか？

ー類人猿社会の食物分配と社会システムの関係ー

黒田 末壽

滋賀県立大学名誉教授

1 伊谷純一郎が目指したもうひとつのテーマ

伊谷は霊長類の社会構造の進化過程を生涯の考察課題にしていたが、もうひとつの大きな課題がある。それは、霊長類学を開始する以前から関心を持っていた「心の進化」の解明である（伊谷 1991）

伊谷は、これが心の進化研究にあたるといったことは書かなかった。しかし、1984 年から着手した「共存原則」の研究がそれにあたるといえる。というのも、共存原則として平等原則と不平等原則を抽出し、人間の平等社会への道筋を展望した 1984 年（1987）の論文では、チンパンジーとボノボ（*Pan* 属）に見られる食物分与（伊谷は食物分配ではなく食物分与を使う）を、平等原則を客体化する行為と位置づけただけでなく、食物分与が成されることの意義を、自己の客観視、他者の欲求を付度する、慮る、思いやりといった、まさに心の問題に踏み込む用語で説明しているからである。また、『構造をつくる行動』（1987）において分析の展望として、「ひいては霊長類の価値の体系の記述をする」とも宣言している。

留意すべきことは、これらの論文には心理研究の概念が用いられていないことである。伊谷は学部生の頃から心理学に入れ込み学んでいるが（伊谷 1991）、心の進化に分け入る方法としては不十分と判断したらしい。『構造をつくる行動』では、心理学には失望したと述べている。そうして自ら構築してきた霊長類社会学の観点と方法をもって、心の進化に取り組もうとしたと言える。上記のことで言えば、伊谷は、自己の客観視や思いやりといった心理その能力や動きを、食物分配という観察できる行動によって明らかにできる可能性を提示している。そのことを明証するにはより詳細な分析が必要と思うが、このことはしっかり受け止めるべきである。

「霊長類の価値の体系」についても付け加えておこう。ここでの価値は、社会的価値のことである。

社会集団の共存原理は、個体の行動を規制する。個体がそれを意識するとき、その規制は規範、ルール、アイデンティティなどと、状況によっていくつかの名で呼ばれる（黒田 2013）。ヒト以外の霊長類であっても社会集団の維持＝メンバー間の共存がなんらかの「規則」によって支えられているとすれば、それは、その集団にとってもっとも上位の社会的価値といえる。もちろん、サル自身が「自分はいまこれこれの規則に従っている」などと認識しているわけではないだろう。だが、共存を成り立たせる自己抑制では、サルの場合でも意識的な抑制をしていることが行動に現れるという意味では、規則が出現しているといつてよい（黒田 2015）。

以下では、伊谷の共存原則論における食物分配の位置づけをつめてみる。

2 共存原則の進化と食物分配の位置づけ

「人間平等起源論補遺」（伊谷 2008）において、伊谷は共存原則進化の道筋をつぎのように簡潔にまとめている。

- ⑩交渉を通じての平等・不平等以前の、互いに避けあうことを前提とした対等（equipotency）という状態（＝単独生活の夜行性原猿類）
- ①原初的平等＝単婚の集団：雄雌が 1 頭ずつで対等。
- ②先験的不平等の社会＝母系の原理に支えられ、個体間の交渉が優劣で貫かれた社会。ニホンザルの雌間関係が典型。順位は母系血縁集団の中で宿命的に決定づけられる（☆ただしメスのみ）。この不平等はルソーの言う不平等とは異質である。
- ③先験的不平等以上の社会における個体の共存のあり方＝不平等原則によるか＋先験的な不平等を仮にないものとすることによって開ける平等（＝約束による平等＝条件的平等＝人間性の起源）によるかのいずれかによる。

ボノボやチンパンジーの社会では、先験的不平等性は力を失い、約束による平等に頼る傾向が強くなって行くのが認められる。

狩猟採集民、焼畑農耕民、遊牧民などの多くが条件的平等によって生きながらえている。

- ④社会的不平等（＝ルソー的意味での不平等）を容認する共存。エガリタリアン・ソサエティーを除く、富の蓄積・貧富・社会階層の発生、支配・権力が芽生えたあとの、すべての人間社会。

上記③の *Pan* 属にかんする伊谷の説明（人間平等起源論）

Pan 属の社会は、共存のための支柱を自ら作り上げていかねばならない。40 頭から 100 頭といった単位集団をもちそこで立派に共存を達成しえているということは、その補うべきものを彼らの社会の中に見いださるはず。それこそは、条件的平等原則の台頭にほかならない。

伊谷は、その具体例としてボノボの多彩で頻繁な GG-Contact と食物分与を挙げ、とりわけチンパンジーにも共通する食物分与を次のように位置づけている。

- 1) 価値のある食物が個体間を動く＝流通経済の萌芽
- 2) 持つ者から持たざる者へのもの食物の流れを権力社会における搾取とは逆の方向、芽生えつつある平等性を単なる関係としてではなく客体として保証していく。
- 3) 自分が好ましいと思う物が相手にとっても価値ある物と付度する心をもっている＝思いやりや（自己の）客観視につながる心の働き。思いやりの基盤なしには分与は成立しない。そしてこの心の芽生えも、不平等原則に違反し、平等原則に沿った何らかの社会的規矩を求めるための原動力になっていると見なしてよい。

つまり、伊谷は食物分与（分配）が平等原則を支え、条件的平等原則社会の根幹にかかわると認識している。

3 食物分配の政治学と社会学

進化学の観点では、分配行動が出現するためには、

それが個体ないしその血縁者にとって繁殖上の有利さをもたらさなければならないから、一般的な食物分配の論文は、分配が個体関係とどう関係するか、分配者にとってどう有利かを分析する。これを分配の政治学としよう。あるいは、分配の道具論でもよい。

伊谷の観点はこれとは大きく異なる。彼は対象動物の社会の維持機構や社会のありかた＝個体間のかかわりのありかたとどう関連するかを考えようと提案している。分配の政治学は主体の繁殖に有利さかどうかの問題なので、行為主体の意識や他者理解には重点がない。それに対し、伊谷は行為者の自己認識や他者理解、そして物の動きや社会的価値の観点から食物分配をとらえるのである。この見方を分配の社会学としておく。

むろん、両方があいまって分配行為の理解に近づくが、政治学では、所有の問題をうまく説明できない。あえて言えば、他個体が保持者の食物を取らないのは攻撃される恐れがあるということになるが、低順位個体のものを高順位個体が取らねばならず、また、子どもは盗むのだから、説明に矛盾が生じる。しかし社会学の方では、自己・他者理解がベースになるので、ある個体が保持している食物と保持者との関係を認知し、あるいは、手をそっと伸ばしてみても、相手の反応でそれ以上は自制する。その態度や行為が食物保持者と食物の関係を「所有」といってよい関係として形作るのである。

4 伊谷の議論の修正

しかし、伊谷の議論自体には修正点も多く残っている。例えば、伊谷は優位者から劣位者への食物の流れに注目したが、食物分配を詳しく見ると、優位者による分配は、順位秩序維持に役立っており、不平等性を平等性によって維持しているとも考えられる（黒田, 2011）。また、これとは別に、持つ者と持たざる者の区別がなく共食する、あるいは分割するタイプがある。これは反秩序型分配と呼ぶことができる（黒田, 1999）。

さらに、ドゥ・ヴァール（1982）は、チンパンジーの雄間関係はそれほど安定していず、殺し合いで

決着を見るような側面を指摘し、まだ、共存のシステムが十分でなく、レシプロシティのような相互性の確立ができていないと指摘している。ただし、ドゥ・ヴァールの観察集団は雄の数が少なすぎる特殊性が共存の不安定さを増していたのかも知れない。

チンパンジーとボノボ社会での平等原則と不平等原則の働きは、それぞれが単独で生じているとは限らず、両方が関連しコミュニティ状況と絡んで出現する（黒田, 2011）。したがって、共存原則が集団維持にどのようにどこまで貢献しているかは、まだ、検討すべき課題として残っている。

5 補足：ボノボの食物分配の特性

- 0) 価値あるものを分配するということ、おしみ＝消極的分配⇒そこから分配は自己の欲求の断念になる。
- 1) 食物保持者の順位にかかわらず、オトナの個体間で食物の強奪はほとんどない。食物がある個体のハンドリーチ内にあれば、他個体は手を出さない＝「所有」が保証される。ただし、食物保持者が未成熟個体である場合、しばしばオトナに奪われる。また、子どもは盗みを働くことがある。
- 2) 同時に大きな食物（果実）に2個体が手をかけた場合、悲鳴を交える引っ張り合いになることがあるが、攻撃は生じない。
- 3) 雌の分配頻度は個体差が大きい。優位な年寄り雌の分配頻度が高いが、分配しない優位雌もいる。
- 4) 性行動がともなうと、大きな食物は大きなポジションに分割されることが多い

- 5) 食物保持者の雄が雌にプレゼンティングされると、向きを変えて無視しようとする。交尾すると分配せざるを得ないことが分かっている。
- 6) 自分で拾える食物があるにもかかわらず、若い雌は優位な雄や雌にねだることがある。
- 7) 大きな果物は物乞いに対する黙認分配から共食に移行することがある。その場合でも、保持者は1頭で確定できる。
- 8) パイナップルなどを持った個体、特に雄は、不安げになる。若い個体は持って逃げ、大人は逃げずうろうろするが、他個体に囲まれて分配を始めると落ち着く。独占欲と社会的立場の葛藤。
- 9) 若者はオトナになると分配を始める。欲求の対象を断念する能力の獲得＝社会意識の確立。

参考文献

- 伊谷純一郎(1987)『霊長類社会の進化』平凡社。
伊谷純一郎(1991)『サル・ヒト・アフリカ 私の履歴書』日本経済新聞出版社。
伊谷純一郎(2008)「人間平等起源論補遺」『伊谷純一郎著作集3』平凡社。
黒田末寿(1999)『人類進化再考—社会生成の考古学』以文社。
黒田末寿(2009)「集団的興奮と原始戦争—平等原則とは何者か」河合香吏編『集団』: 255-274, 京都大学学術出版会。
黒田末寿(2013)「制度の進化的基盤」河合香吏編『制度』: 389-406, 京都大学学術出版会。

コメント

人類学の視点でサルを捉えるとはどういうことか

鈴木 滋
龍谷大学大国際学部

今回の2つの話題提供について、霊長類学の立場からコメントします。私は、ニホンザルとアフリカ類人猿を野生で研究してきましたが、所有や互酬性や食物分配などの社会交渉を詳しくみてきたわけではありません。研究の専門が近いというより、以前から、こういった社会交渉を人類学的に見ようとする立場には魅力を感じてコメンテータを引き受けたものです。というのも、近年の霊長類学は、サルの生物学的理解に偏っていますが、霊長類学が当初もっていた、生物学とは異なった地平でサルとヒトを理解する人類学的な立場を、このシンポジウムの趣旨に読みとり、そこにこの分野の研究の原点と重要性を感じているからです。オーガナイザーの竹内潔さんによるシンポジウムの趣旨の概要には、大型類人猿と狩猟採集民の食物授受の事例から「モノをやりとりする行為の根源性」を考察するとの方針が示されており、サルの社会行動をDNAや環境要因に還元して理解する昨今の趨勢に物足りなさを感じてきた私には、魅力的な研究会に映ったわけです。

今回の話題提供者の保坂さんと黒田さんは、竹内さんが主催する別の研究会のメンバーでもあるとのことで、今回の方針については理解を共有されていたのだと思います。本来なら、竹内さんから今回のシンポジウム冒頭で、その旨の趣旨説明があったはずだと思われそうですが、竹内さんが体調不良のために欠席されたので、こうした方針についての明示的な説明がなく、一部の参加者にはわかりにくかったかもしれません。また、予定されていた竹内さんの狩猟採集民の発表があったら、そのあたりの背景について、より理解がすすんだのかもしれません。竹内さんの発表が聞けなかったのは、つくづく残念なところです。

日本の霊長類学は1940年代に今西錦司を理論的なリーダーとして出発し、当初から生物学から距離

をおこうとする方針をもっていました。すなわち、比較社会学として人間社会や文化の起源を解明するという目標をかかげて始まりました。こうした方針は、今西の方針の受け継ぎ、霊長類学と生態人類学をつなぐように発展させた伊谷純一郎によって以下のように解題されています。

今西先生は種社会とそれを構成する種個体とのあいだに、群れ生活者の根源的な主体性を求め続けておられたのだと思う。(伊谷 1992)

そのうえで、伊谷は、日本の霊長類社会学は、「独自の目的と方法を持ち、生物学からの安易な還元的思考を許さない」と明言し、この点が対外的に理解されていないことも指摘しています(伊谷 2003)。このあたりの霊長類研究史とその理論は、霊長類研究者のなかでも誤解がみられ、重要な論点が含まれているのですが、それは別の機会に論じたいと思います。

保坂さんの発表は、12ページにおよぶトーキングペーパーが用意されていて、欠席した竹内さんの発表に相当する時間もすべて使った、内容豊かなものでした。チンパンジー研究の泰斗である師匠の西田利貞さんとともに、マハレという稀有な調査地で共同研究をされた、保坂さんの解像度の高い観察力にもとづく肉分配の具体例を堪能する発表でした。発表タイトルにある「ダイアッドを超えた対面的相互行為の場」や、肉分配についての「泥臭い事例分析」という表現が示しているのは、従来の生物学的な理解におさまりきらない、チンパンジーの多義的な社会交渉への視線でした。マハレでの研究のみならず、これまでの所有や分配の定義や機能仮説についてのレビューは、マハレで長年調査と研究を積み重ねてきた保坂さんならではの丁寧さで、チンパンジー研

究の歴史とその厚みを改めて感じました。そこでは、チンパンジーの肉分配を説明するこれまでの仮説群が、チンパンジーの社会交渉の意味を十全に扱えていないことが指摘されました。事例のなかでも特筆すべきは「口移しのシラミ分配」ですが、この観察をこの精度で成立させた保坂さんの眼力には恐れ入りました。これらのレビューと観察例をもとに、肉食クラスターのフェイズは3つにわかれ、所有と分配についての二者間を超えた共通認識が生じるとの理解が示されました。この現象理解は、おおむね納得できるとはいえ、これだけでは本人も「ダイアデックな相互行為を超えるなにかを見出せたか」というと心許ない」との総括をしているとおり、ヒトとチンパンジーをつなげて理解するために、もうひとつ分析軸あるいは理論的なポイントが欲しいところであると思いました。チンパンジー研究において、「泥臭い事例分析」をせざるをえない、定型的行動パターンとして理解を阻む事例の多様性は、おそらく生物学的理解におさまりきらないチンパンジーらしさを反映しているのでしょう。ですから、保坂さんの視線の方向的をえていると思われ、現象の記述的な理解の先が期待されるところです。

黒田さんの発表は、「食物分配が平等原則の客体化であるとはどういうことか？」というタイトルから、この分野に通じた人には、伊谷純一郎が人間平等起原論で指摘した、チンパンジーやボノボの食物分配にみられる平等性への萌芽という論点の検討であることがわかります。これまでの黒田さんの著作を知る人にとっては、この論点が黒田さんのメインテーマであることは明らかでして、霊長類社会学の「本家筋」とでもいうべき論点と論者といえるでしょう。黒田さんの発表では、伊谷による平等原則と食物分配の関連を丁寧に説明したうえで、ボノボによる食物分配の特性を自らの観察からまとめて検討をするものでした。そこで強調されていたのは、ボノボの食物分配をめぐる「葛藤」や「物惜み」といった心理的な側面で、そのことが、生物学的な説明に還元できない論拠とされていたと思います。この点について、当日の私からのコメントで、個体の心理に理解のポイントをおくことで、社会学的な理解

から離れるのではないかと問いかけたところ、「社会生成」として捉える方向性の一環であるという意のお答えでした。すなわち、ボノボやチンパンジーの食物分配は、狩猟採集民の食物分配のように制度として運用されているのではなく、場当たりの（制度化されていない）分配として、「社会生成」の場面をその交渉に見ようとする意図があるとのことでした。黒田さんの名著「人類進化再考」（黒田 1999）の副題にある「社会生成の考古学」とは、現生類人猿に人類進化史における「制度」の起源をはじめとする「社会生成」の復元材料を見るという、ご自身による解題をきき、出版から20年の時をへて、私にはこの副題の意味がようやく腑に落ちた気がしました。とはいえ、今回の発表タイトルの副題にある「社会システム」との関係については、ほとんど言及がなく、システムという用語の曖昧さもあって、社会システムと食物分配についてのさらなる論考をぜひ聞きたいところでした。

ヒトの食物分配は、相手に対する好意と対応しているように思いますが、類人猿の食物授受は社会関係の改善とつながっているのかについては、まだまだ検討されていないように思います。また、食物の授受は利他的で、互酬性の基礎となることから、最近では生物学的に理解がされるようになってきた倫理や道徳とのつながりについても、社会学的な理解を必要としていると考えられます。とくに食物という客体を観察できる点で、社会的な現象の可視化という利点をもつために、食物授受をめぐるサルとヒトの比較というテーマが、今後さらにこの方向の研究の展開をめざすべきであることを思わせるお二人の話題提供でした。

人類を含む霊長類を、遺伝や環境にプログラムされた生物としてではなく、より主体的な存在として捉えようとする霊長類社会学は、これまでもさまざまな試みがなされてはきたものの（たとえば、寺嶋 2010）、最新の機械や技術をつかった生物学的な理解の進展のまえに影がうすいのが現状です。伊谷が強調したように、「安易な還元的思考を許さない」社会学的なサルの理解をもとに、今回のシンポジウムのようなサルとヒトを架橋する試みを、霊長類学から

も続けたいと考えています。

当日の司会は、竹内さんの指示で、分科会幹事として対応していた私が急きょ引き受けました。進行が行き届かないところもありましたが、20名弱の参加者の皆さんの熱心な討論もあり、楽しく終えることができました。ここに改めて参加した皆様のご協力に感謝いたします。

参考文献

伊谷純一郎（1992）「人類学の視点でサルを捉えるー

新しい霊長類学への道」アニマ 241：20-26. [伊谷純一郎著作集第6巻に所収]

伊谷純一郎（2003）「類人猿にみる人間」（伊谷純一郎，尾本恵市，養老孟司の共著）中山書店. [伊谷純一郎著作集第3巻に所収]

黒田末寿(1999)『人類進化再考-社会生成の考古学』以文社.

寺嶋秀明（2010）「序にかえて（小特集 霊長類学と人類学の架橋-『伊谷純一郎著作集』完結を記念して）」人間文化 27：1-3.

コメント

視線のコミュニケーション：互酬性概念の再考に向けて

松村 圭一郎

岡山大学大学院社会文化科学研究科

霊長類研究の分配の事例はいずれも興味深く、人間社会の経済人類学的研究の視点からみても示唆に富む発表内容だった。ここでは霊長類から人類へと通じる普遍性と差異を考えるために、発表のなかでキーワードのひとつとなっていた「互酬性」という概念に絞ってコメントしたい。

保坂和彦さんがチンパンジーの観察から提示された事例では、分配を導く最初の行為として「のぞきこみ」が指摘されている。保坂さんは「食べているレモンに興味があることをゲクロ（老齢雌）にしつこく見せつけている」と解釈する。ゲクロはその「のぞきこみ」を無視する。それはおそらく、相手の視線を受けとめることは、分配を受け入れることになるからだろう。この「のぞきこみ」は、坂巻哲也さんのボノボの観察事例においても、手を差し出す「物乞い」とともに、食物をもつ相手に分配を促すときに頻繁にみられる行為だ。私はあなたのもつ食物が欲しい。その欲求を相手に呈示する。それが分配へと相手を促す交渉の所作なのだ。この視線をめぐるコミュニケーションは、狩猟採集研究でも指摘されている。

市川光雄（1982）は、ムブティ社会には、明確な「邪視」の観念はないものの、無遠慮に他人や他人のものを見つめることはいけないこととされていると指摘する。とくに食事の人間をじっと見つめることは禁じられていて、市川が食事中に子どもが近くに来てじっと見ていると、大人が厳しく叱りつけて連れもどしていた。これは人間社会においても「視線」が自己の欲望を相手に示す直接的な表現として機能しており、だからこそ、それがあつた状況では忌避されることを物語っている。このことは、たとえば日本でも、電車のなかで子どもが他の乗客が持っているものをじっと見つめたりすると、あまり見ないように親が子どもの気をそらそうとするような行

為にもつながっているだろう。人間社会では、視線によって自己の欲望を他者に露骨に呈示することは、ときに恥すべきこととして避けられるのだ。

この視線をめぐるコミュニケーションは、保坂さんが再検討している「互酬性」という概念をとらえなおす鍵となる現象だ。それは黒田末寿さんが『人類進化再考』（1999）で論じている「欲求の断念と自己の客観視」という論点とも関係している。チンパンジーは、他個体の欲求を自己の欲求と同じレベルで感じとり、それを同等視するという自己を客観視する能力をもっている。この他者の視点をとれる能力は、人間の間主観性にも類似したものだ。ただし黒田さんは、人間であれば他者の欲望の断念を察することができるが、チンパンジーにはそれはできないと指摘する。つまり、人間的な互酬性は他者の欲望の断念を感じとり、それを負い目として引き受けることがひとつの契機となっているものの、チンパンジーでは、そうした「負い目」を感じとることなく、互酬的なモノのやりとりにはなりにくいという性質があるのだ。

互酬性は、一般的にモノの双方向的なやりとりとされてきた。しかし、黒田さんの議論をふまえると、それはこの自己と他者の欲望とその断念への一致という間主観的な相互行為の起点となるものと考えることができる。人間でも、他者の欲望の断念を感知したとしても、モノを相手にお返しするとは限らない。互酬性は潜在的には結果としてモノの双方向的なやりとりにもなりうるが、あえてそれが起こらない（しない）こともある。たとえば、親しい間柄にある男女で、携帯にメッセージが来ても、すぐに相手に返事を返さないといったある種の交渉が行なわれるケースを思い浮かべるとわかりやすいだろう。そこには互酬性は潜在的には生じているが、双方向的にしない（あるいは遅らせる）ことに意味をもた

せることがあるのだ。それが「交渉」になりうるのは、相手が自分の心の動きを察することができること、そして相手も自分が相手の心の動きを察知しているはずだ、という何重にも連なる自己・他者認識の連鎖がある。

互酬性という概念をたんなるモノや行為の明示的な双方向のやりとりと限定すれば、その概念の有用性は著しく低くなる。むしろ、人間と霊長類をつなごうる概念として再検討するときには、互酬性を他者の欲望と自己の欲望の同等視、他者の欲望の断念の察知という間主観的な認識能力によって喚起される力学ととらえたほうが有用だと考えられる。そうすれば、人間の市場における商品交換のようなモノのやりとりを理解するときにも有用な概念になる。本来、交換される商品がどういう意味で「等価」なのかは判然としない(なぜある商品が1000円と等価なのかは複雑な要素が絡まって一概にはいくらであれば等価かは自明ではない)。それにもかかわらず、とりあえず「等価物の交換」だとすることで、「自己の欲望の断念」(1000円を払った)と他者の要望の断念(商品を引き渡した)が一致していると

みなして、私たちはわだかまりのないモノのやりとりを遂行している。贈与交換のように、あえて等価性を明示せず(値札を剥がし、包装紙で包むなど)、「自己の欲望の断念」と「他者の欲望の断念」の一致をあいまいにすることで、「負い目」の可能性を完全には払拭せず、関係性の持続をはかることにもつなげている。これらはいずれも「互酬性」という概念をたんなるモノの双方向的なやりとりに還元しては、みえてこない理解だ。人間のモノや行為のやりとりがどういう社会的意味をつくりだしているのか、それが霊長類の食物や行為のやりとりとどう連続し、どう断絶しているのか、その理解を深めるにはモノや行為の動きだけを見ては不十分なのだ。

参考文献

市川光雄(1982)『森の狩猟民：ムブティ・ピグミーの生活』人文書院。

黒田末寿(1999)『人類進化再考：社会生成の考古学』以文社。

コメント

ヒトとサルの境界をめぐる自発的分配について

田島 知之

京都大学大学院理学研究科

今回のシンポジウムが掲げる最終的な目的は、大型類人猿と狩猟採集民の食物の授受行為の根源性について考えることであった。手に入れた食物を他者と分け合う「食物分配」は人類では文化を超えて日常的に行われる行為であり、人類に近縁な類人猿にも同様の行動が認められることから、両者を比較することでその進化的基盤を明らかにすることができるかもしれない。シンポジウムでは、保坂氏はチンパンジーの肉分配を、二者間の相互行為を超えて周囲の個体を含めた「場」に影響を及ぼす現象として捉えることで、人類社会の食物分配との共通性について発表された。黒田氏は、優劣関係が反映されないチンパンジー属の食物分配に平等原則の萌芽を見る捉え方について発表をされた。

シンポジウムでも言及されたが、人類と大型類人猿の食物分配について最も異なる特徴として挙げられるのが「食物の所有者が自発的な分配をするか」という点である。一般的には、人類では所有者が積極的に分け与えることが多く、それに対して類人猿では他個体が食物の一部を持って行くことを所有者が許すという消極的なやりとりが多い（西田・保坂, 2001）。

まれではあるが、大型類人猿においても食物の所有者が自発的に他者に食べ物を与えることはある。私はオランウータンたちの間で、明示的な要求行為なしに、所有者が食物を非所有者に対して差し出した場面を観察したことがある（田島, 2010）。木陰で複数のサツマイモを抱えて食べていた個体が、その場を発見して近づいてくる他個体に一部を自ら渡して、その場を離れたという場面であった。黒田(1991)はサトウキビを多く持ったボノボに他個体が近づくと、所有者が一本だけ残して立ち去るパターンを「置き残し」と呼んだが、私の観察した食物の「先渡し」



図1. 大人のオスから食物を取ろうとするオランウータンの若メス。このとき明らかに体格で上回るオスがメスを攻撃することはほとんどない。

も非所有者からの要求行為なしに所有者が自発的に食物を手放したという行動要素だけを取り出せば共通していた。これらの「先渡し」事例から、大型類人猿も他個体の食物に対する欲求を推察することが可能で、相手の要求に先回りして対処したのではないかと私は考えている。

食べ物を自ら差し出すことが特徴とされる人類においても、「食物は分け与えねばならない」という規範や、「所有する食物を分けない人はケチだ」という社会的評価のような心理的圧力が、所有者に（見かけ上は）自発的な分配を促している可能性はじゅうぶんに考えられる。言い換えれば、人類に特徴的とされる積極的な食物分配は、制度化された「先渡し」なのではないかと捉えることもできるのではないかと（岩田・田島, 2016）。実際に、狩猟採集社会のハンターは、獲得した食物の多くをキャンプの外で食べてしまい、残りをキャンプに持ち帰って分配するという報告もある（Berbesque et al., 2016）。食物分配に見られる所有者の自発性を、人類と類人猿を明確に隔てる特徴として採用すべきかという点には再考の余地があるだろう。まれな観察から得た着想に

基づく意見ではあるが、人類と大型類人猿の食物分配を比較する試みに対する現時点での私のコメントとさせていただきたい。

参考文献

Berbesque JC, Wood BM, Crittenden AN, Mabulla A, Marlowe FW (2016) Eat first, share later: Hadza hunter-gatherer men consume more while foraging than in central places. *Evolution and Human Behavior*, 37(4) 281-286.

岩田有史・田島知之 (2016) 「贈与以前—ヒト科類人

猿の食物分配」(編) 岸上伸啓『贈与論再考—人間はなぜ他者に与えるのか』臨川書店 pp. 42-69.

西田利貞・保坂和彦 (2001) 「霊長類における食物分配」西田利貞編『ホミニゼーション』京都大学学術出版会.

田島知之 (2010) 「半野生オランウータンにおける食物分配行動」生態人類学会ニュースレター16号, 生態人類学会.

分科会事務局

京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室内

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

電話:075-753-4083

ファックス:075-753-4083

e-mail: evo_anth AT anthro.zool.kyoto-u.ac.jp

http://anthro.zool.kyoto-u.ac.jp/evo_anth/evo_anth.html